

た當時から獨り著者の懐いて實現しなかつたこの史料集が、今出版されて斯界に好評を以て迎へられてゐるといふのもこの學界の傾向に投合するものであらう。更にいへばそれは大正十一年に成りし福井縣史の史料集といふだけではなく、この史料集によつて新しい福井縣史が顯みられるといふ意味を持つものであらう。(菊判、本文八四五頁、圖版四十二葉、三秀社發行、定價九圓)〔福尾〕

●春日神社文書 第貳

去昭和三年の春始めて公刊せられた春日神社文書の第一巻は嘗にその豊富なる内容に於てのみでなく、その整備せる編纂體例に於て、正にこの種の出版中の白眉と稱せらるべきものであつた。殊にその巻末に人名地名件名等の詳細な索引を附したことは、大日本古文書の編纂に於てさへも未だ能くなし得なかつたところ、その勞苦とその親切とは永く研究者の感謝を受くるに値するものであつたが、この度同じ綿密の用意を以て編纂せられた續編が前巻の公刊以後五年にして漸く出版せられるに至つた。前巻に收められた六百幾通の文書は既に早く一度神社に於て整理せられてあつたものであるに對し、この度のものは多く反古同様に篋底に藏せられてゐたものといへば、その整理と原稿作成の苦心は前巻に倍するものがあつたであらう。併しそれだけにまた、その内容はこの度始めて世に紹介せらるゝわけに舊職であつた正眞院家を始め現舊社家に傳へられた文書の

併せて載録せられたことは最もよろこばしいことである。

今就中注意すべきものは二三を擧ぐれば、興福寺叢會の議によつて春日野參道の兩側に植うべき柳櫻各一本を塔頭諸院に課した建長三年の請定、同じく叢會の議に基く廻廊修造石並に形本經藏石の各支配注文の如きは、その事柄の些末なるにもか、はらず興味ある文書であり、また近世能樂三座がその本據を江戸に遷さんとした前後、神事の關念を憂へて、しきりに之を止めんとした興福寺五師役者連署の奉行所宛口上書の如き、他に史料乏しきこの方面の研究に裨益するところが多いであらう。而して若し社領の莊園やその諸職その他一般社會經濟史的史料に至つてはもとより一々枚舉せらるべくもない。本書中に現はれる莊園のみを列舉しても三百の餘に上るであらう。正眞院家舊藏のもの、中では擁津垂水西牧に關する後白河院近衛基通及源義經等の西海道追討使兵士糧米停止に就ての文書が最も珍しいものである。(總通數七百九十七(菊判千九頁)圖版十六、索引六十二頁、東京上田泰文堂發行、定價未詳)〔柴田〕

●世外井上公傳 五卷

世外井上馨侯に關しては、明治四十年、中原邦平氏によつて「井上伯傳」編まれ、大正十年、澤田章氏編にかゝる「世外侯事歴維新財政談」が公刊せられた。併し、前者は明治戊辰の役の時を以て筆を擱き、世外侯眞の活躍期なる明治以後を缺き、書の名付けられたるところと、其内容甚だしき隔りを有し、僅かに、侯が幕末期に於て既に後年雄飛すべき素質を現はし始め

たこと、侯の生涯を一貫したる歐化政策の萌芽あること等を窺はしめるに過ぎず、後者も亦其表題に示された如く、熊谷直之、林宇兵衛、澁澤榮一、佐伯惟馨、井上馨等財界の巨星の談話を収録したものの、政治家としての侯の一面を興味深く味はしめるに止り、未だ根本的史料となし難いうらみがあつた。

今回、阪谷芳郎男を代表者とする井上馨侯傳記編纂會の上梓公刊した「世外井上公傳」は「井上伯傳」に載せられざりし明治以後の事蹟を細叙して前書の不備を補ひ、政治家、政治家、外交家としての侯の生活の全貌を描いて、前記「財政談」に於て尙知り得ざりし侯の多面的活躍の領野を傳へんとしたものである。

編纂にあつて、主として井上侯爵家、伊藤公爵家所藏書類を經とし、諸家並びに諸官省所藏書類及び刊行書を緯とし、正確整備詳略此種の傳記として優秀なるもの、隨一に屬する。

十二篇よりなり、家系及び修養時代、勤王運動時代、維新參政時代（その一）の三編を第一卷に、維新參政時代（その二）、在野經營時代の二編を第二卷に、參議省卿時代、外務大臣時代の二篇を第三卷に、農商務大臣及び在野時代、内務大臣及び在野時代、大藏大臣及び在野時代の三編を第四卷に收め、第五卷には元老時代、薨去及び逸事の兩篇を記すことに豫定せられてある。八十年の侯の生涯が殆んど公人として經せられたこと、就中明治初期國內整頓時代に大藏省に於て、明治中期國力發展期に外務省に於て大政に參畫したことは、本書をして世外公傳に終らしめず、明治側面史、否、明治正史たらしめてゐる。第一

卷々頭に載せられた家系、年譜、各卷隨所に挿入せられたる寫眞版は、本文と相照應して井上侯の公私生活の全面を幾多の角度から照明し、明治維新史、明治史研究者を裨益するところ尠なからざるものである。

本書は侯の縁故者の企により編纂し、勝之助未亡人、栗野愼一郎、中田敬義、野崎廣太、高衛義雄諸氏の校閲を經、其修訂を受けた、め、「公の眞面目と事蹟の眞相」とを傳へることに努め、公正な態度を以て記述し、徒らに潤飾を事とし曲筆舞文を弄することはないが、侯と三井、三菱との關係は未だ充分其眞相を究めたとは考へ難い。

井上侯を考へずして三井の發展を思ふこと能はず、三井の盛大を考慮せずして明治史を理解し得ない事實は、井上侯を明治史上に躍動せしめることを意圖する本書が此點に關し説くところ少なきを遺憾たらしめるであらう。既刊三卷を閱讀した現在に於ては、此方面に留意した第二の世外井上公傳、或は三井家に關する詳細な歴史を更に要めたい念願を一掃することが出来ない。

第五卷逸話編に或は其缺の幾分かは補はれるかも知れない。併しそれは恐らく如上の渴を醫するに足らないだらう。致て望對の心を述べて紹介の辭を止める。（東京、内外書籍株式會社、全五卷定價各册六圓）

●日本憲政成立史

鈴木安藏著

明治の歴史を形成する大いなる流れとして、中央集權的統一

國家完成への努力、立憲政治への邁進、國際的地位向上のための諸活動の三者が認められ、それらが西歐文物採用によつてはゞ所期の目的に到達し、今日の日本を形造つてゐることも一般に承認せられる見方であるが、明治新政府成立の諸條件がこれ等三大史潮に一定の方向を與へてゐることも亦否み難い事實と云はなければならぬ。而して上述の三つの流れに與へられた一定の方向は、即ち封建的諸勢力の根強き残存に依存するところが多い。我立憲政治開始に至るまでの事情を説かんとするものは、従つてこの事に意を留めるべきである。

然るに従前吾憲法制定の歴史的研究は數多く公刊せられたにも拘らず、その意圖するところは單なる制度變遷の敘述にあらざれば、立憲思想の系統の考證を出でず、明治政府の本質究明或は社會經濟史的的研究を等閑に附したうらみがあつた。鈴木安藏氏の近業日本憲政成立史は、これ等従前の研究と異り、廣く明治史の流れとの關係を説くものであつて、其點吾人の喜びとするところである。

本書が、憲法思想の萌芽發展、憲法制定議會開設の運動の展開、憲法諸理論の對立、憲法制定以後の憲法關係諸事項の推移——その制度、法文解釋等々の變遷——等従前のもとはゞ同様の問題を取扱ひ乍ら、吾々に新鮮味を感じしめる所以は、全一體としての政治的發展の見地を見失ふことなく、これ等の特殊の歴史記述を試みたこと、言葉を換ふれば社會經濟史的方法に據つて我國憲政成立の史的分析を意圖したことに他ならない。

此方法によつて論述する著者は更に二つの點に留意しこれが本書の第二の特色をなしてゐる。その第一は、従前の語説の再吟味に基き新たに獨自の意見を提出し、所謂定説を批判する態度として、その第二は從來或は忘却され、或は不當に閑却されて來た資料をひろく紹介する態度として現はれてゐる。

第一の態度は、五ヶ條の御誓文の一條「廣く會議を興し萬機公論に決すべし」並に政體書を以て議會開設の意向の最初のおらばれとなす俗説、明治七年の民選議員設立建白をもつて自由民權運動の火蓋を切れるものとせる定説を排し、廣い意味において民間から國民議會の開設を要求せるもの、始めを、明治二年幕臣其他薩藩士等の建白に求め、七年の民選議員設立建白の本質を政府内部の反對的運動に過ぎないとなし、憲法制定もしくは議會開設の主張の發生を明治政府自身の自己完成策Ⅱ形態變化と見る。上杉博士によつて繼承され完成された憲法論を帝國憲法本來の正しき解釋と斷じ、現に正統派と目される美濃部博士の憲法論が起源の意味に於て不當なることを主張するものも亦如上の史的根據によるものである。

第二の態度は、本文中にあまた史料を挿入し、附録として植木枝盛の「言論自由論」とジェイ・エス・ミルの「自由論」、同氏著「目下之大問題條約改正如何」、大石正己の「條約改正論」、小野梓の生涯等一般學徒が容易に手にし難き資料を収録し、本書をして文獻に恵まれざる學徒の研究の指針たらしめるのみならず、豊富なる資料の泉としてこれを利用せしめるに成功して

なる。

しかしかくの如きは、又は一石二鳥の嫌なき語はぬもので、其叙述や、もすれば緊張味をかき、或は繁雜に流れ、或は又社會經濟史的説明未だしの憾を残してゐると云はなければならぬ。勿論、本書が種々の條件に制約せられかくの如き一石二鳥的企を敢てした事情を諒とし、述べられた新たな學說、新たな意氣に對し深甚の敬意を吝まざるものではあるが、同時に著者の今後の研鑽に大いに期待するの念頗又湧然たるを禁ずることが出来ない。(本文三五四頁、附録一五八頁、東京、學藝社、定價二・八〇)(以上吉田)

● Ernst Walscr: Gesammelte Studien zur Geistesgeschichte der Renaissance

著者アルセル氏はバーセル大學ロマンス言語學教授の地位にあつた人であるが、千九百二十九年六月二十九日惜しくも逝去した人である。氏はかかれてよりルネサンス精神史に關する著述の完成を志し、着々準備を調へ最早執筆する途に至つてゐた由であるが、惜しくも完成するに至らず逝去されたのであつた。逝去の前年既に病篤き際にも氏の唯一の願望はこれが完成にあつたとかその心中察するに餘りある。本書はその生涯の仕事の完成を見ずして逝去した氏のルネサンス精神史に關する準備研究及び特殊研究の一部を纏めて出版したものである。内容は序文、附録及び W. Kraege 氏の Über die Renaissanceforschung. E. Walsers. なる紹介の他に次の十二の研究を含んでゐる。

- Die Konzilien von Konstanz und Basel, zwei Etappen in der Geschichte der Kirchenreform und des Humanismus.
Coluccio Salutati, der Typus eines Humanisten der ältesten Schule.
Boccaccio.
Christentum und Antike in der Auffassung der italienischen Frührenaissance.
Ein Raubritter der Feder (Pietro Archino)
Ueber das Wesen der französischen Renaissance.
Studien zur Weltanschauung der Renaissance.
Die Entstehung von C. F. Meyers Novelle: Plautus im Nonnenkloster.
Der Sinn des Cymbalum mundi von Bonaventura des Péters.
Alte und neue Ideale der Renaissance im Epos des macaronischen Singers Teofilo Folengo.
Die Gestalt des tragischen und des komischen Tyrannen in Mittelalter und Renaissance.
Menschliche und künstlerische Probleme der italienischen Renaissance.
アルセル氏は千九百十四年ボツヂオに關する研究を發表して學界にその地位を確立したが、氏の最も力を入れたのはイタリヤルネサンス期のフォニスムス研究である。而して氏の研究に